

偉大な「明治」はなぜ悲惨な「大東亜戦争」に行き着いたのか

2011.2.27. 岩崎 信彦

(要旨)

1 日本は明治維新(いしん)によって、アジアで唯一、19世紀に近代化の道に入った。ドイツ、ロシアなどとともに「後進資本主義」国としての道を歩いたのである。

2 その「後進性」の一つは、民主主義ではなく、天皇制絶対主義の国家であったということである。「自由民権」の運動は弾圧(だんあつ)され、官僚と軍部が支配する国家が形成された。

3 「後進性」の二つ目は、資本主義の形成が国家の力で進められ、早期に巨大資本中心の「独占(どくせん)資本主義」を形成して、海外の市場を支配しようとする「帝国(ていこく)主義」の列強に肩を並べ、朝鮮、中国などへの侵略を進めていった。

4 この「富国強兵」(ふこく・きょうへい、国を富ませ軍を強める)政策によって、たしかに欧米列強の植民地になることをまぬかれたが、日本自らが帝国主義になることによって、自国の農民と労働者は貧困と過重労働、人権はく奪(いわば「貧国」)の状況におかれ、アジアの民衆は国土と人命(1千万人以上の犠牲者)を蹂躪(じゅうりん)された。

5 明治維新を進め、「天皇制」支配を支えた民衆の意識は、ある種の「自然(ありのままになりゆく) naturalism」観念(vs 作為(さくい): 徳川による儒教支配)であった。それは「自然村(ムラ)秩序(むらの共同体感覚)」「祖先崇拜=家族主義」を基礎としていたが、「都市化(資本主義化)」によって分解されていくと、<第2のムラ>(同郷団体、学校閥(ぼつ)、町内会など)が都市に形成されて、天皇制を支える基盤となった。

6 さらに「都市化」や階級分解が進み、その<第2のムラ>も解体の危機に瀕し、社会意識が不安化していく中で、「自然」観念が天皇制=儒教道徳から独り立ちをし、「欲望自然主義 desire=naturalism」として表れていき、民衆の欲望のそのままの発露が強められた(精神的退行I)。

7 それに方向性を与えたのが、古代からの天皇の一系的連続性を踏まえた「神国=日本」という観念、アニミズム(精神的退行II)であり、国家=軍部はこれを国民に鼓吹(こすい)することによって、海外への膨張(ぼうちょう)、侵略を促し、「大東亜(だいてうあ)戦争」にかりたてていった。

8 戦後の日本は、民主主義国家になったが、どこまで日本人の精神構造が発展したかは厳しい考察が必要である。世界の奇跡と言われた「高度経済成長」は、アメリカ的「豊かな生活」を求めた、まさに「欲望自然」の発現であったともいえる。それはバブル経済の崩壊という結果に終わった。

9 今、日本は「時代閉塞」の状況を迎えている。新しい未来を再建していくには、日本人の精神構造に立ち返り、その弱点を克服し長所を生かす方法を探求しなければならない。

はじめに ——問題の設定

1. なぜ今、「明治」をふりかえるのか？

・「偉大な」日露戦争を勝利した近代日本は、その後「時代閉塞（へいそく）」（1910（明 43）、石川啄木いしかわ・たくぼく）に陥っていった。そして、「神国日本」というスローガンのもとに悲惨な大東亜戦争・太平洋戦争を遂行し、アジアで 1000 万人を超える多くの犠牲を出した。（日本 300 万人）

・第 2 次大戦の後、高度経済成長を遂げた現代日本は、今また「時代閉塞」に陥っている。これを乗り越えていくために、近代日本の「成功」と挫折から学び直さなければならない。

2. イラン革命（1979 年）を経て形成された今日のイラン社会は、民主主義という課題を抱えているようである。もしも日本の近代の歴史から（他山の石、反面教師として）参考にできるものがあるとすれば、それは何なのか？

・日本の「明治」は、宗教的権威を政治の世界に直接もちだし、「天皇制絶対主義」を形成して「近代化」を推し進めた。当初は成功を収めたように見えたが、結局、「神国日本」「現人神=天皇」というウルトラ宗教意識によって国民精神が動員され、「天皇制ファシズム」へと突入していった。

・政治と宗教のかかわりについて、イランとどのような類似性があるのだろうか。

1. アジアで唯一早い時期に「近代化」できた要因

日本は 19 世紀の 1868 年に明治維新を達成し、アジアで唯一「近代化」の道に入った。その要因はどこにあるのか？

(1) 進んだ外国文化を取り入れるのが得意な日本

・地政学的 geopolitical に有利な位置

①中国などが侵略してくるには遠い、②大陸の進んだ文化だけが伝わってくる。

・幕末、蘭（オランダ）学を通じて西洋の学問を吸収した。

・漢字（中国からの文字、公用語）とかな（日本固有の土着文字、生活語）の混じり言語。

→ 外国文化を取り入れることに抵抗が小さい。それを土着と習合させていく。

(2) 江戸幕府 (ばくふ) = 「封建 (ほうけん) 制度」のなかで一定の契約、人材登用、教育など非人格的 impersonal、合理的な社会認識を育てることができた。

・王朝的な人格的 personal 「恭順きょうじゅん piety」による支配 (例えば中国清朝しんちょう) ではなく、一定の契約性をもった支配関係が形成された。ヨーロッパの封土 (領地) 封建制に対して、日本は秩禄 (米給付) 封建制であり、中央集権制 (=諸侯の徳川への従属性) が強い。
(M.ウェーバー)

・武士は「藩校」で、民衆は「寺子屋」で勉強した。

(3) 幕藩体制の矛盾の増大と民衆、「雄藩 (ゆうはん)」下級武士の運動

・幕府の経済の基礎が、農民の階層分解、貨幣経済の発展で衰弱

・新しい富農=マニファクチュア (工場制手工業)、商人の経済力の発展

・農民一揆 (いっき)、打ちこわしという民衆運動、長州 (ちょうしゅう、現在の山口県)、薩摩 (さつま、現在の鹿児島県)、肥前 (ひぜん、現在の佐賀県) などの藩の「近代化」と下級武士の力の増大

・リードする思想家の輩出。

(4) 欧米列強 (おうべい・れっきょう) による植民地化の危険と「鎖国 (さこく)」からの目覚め

・「攘夷 (じょうい)」という国民意識の形成。a 封建的な排外主義、b 民族防衛、愛国主義 patriotism

・「尊王 (そんのう)」という国民意識の形成。a 日本古来の「神」を復興、b 絶対主義の担い手

・欧米列強は相互にけん制しあって、幸い日本をごく部分的にしか植民地化できなかった。

2. 明治維新体制の近代性と封建性・絶対主義性

(1) 民主主義ではなく、「一君万民 (いっくんばんみん)」という似非 (えせ) 民主主義を採用

・絶対主義君主=天皇。絶対主義の基盤は、封建的地主層と新しいブルジョア層のバランス。

・四民 (士農工商しのかうしょう) 平等。しかし、賤民 (せんみん) 身分は「新平民」。新たに華族 (貴族) 制度。

・薩摩、長州による「藩閥 (はんぼつ) 官僚」体制の形成

(2) 国民意識の形成のために、武士道徳=儒教を「忠君 (天皇への忠義)」「親孝行」として全国民に浸透。

・学制 (明 5)、教育令、天皇「教学大旨 (きょうがく・たいし)」(明 7)、教育勅語 (ちよくご) (明 23)、

(3) 「富国」のための農民収奪、国家による上からの資本主義育成

・地租改正 (ちそ・かいせい) (明 6) 土地所有権を認め、地価の 3/100 を金納地租 (税金) 当時、3分の1は小作地。小作料は6割以上。国家による地主保護。

事例：地租 34%、地主 34%、小作 32%（幕藩時代、37%、24%、39%）

・郵便制度、鉄道（軍事的観点が濃厚）。官営の製糸業、軍事工場（輸入機械と外国人技師）、鉱山（高島炭鉱では囚人労働導入）。

・大商業資本と政府の結託

三井：政府の金融・財政政策と表裏一体の活動

三菱：74(七年)台湾侵略軍の輸送のために 13 隻の汽船を買い入れ、無料且つ補助金つきで三菱に預ける。

住友：別子（べっし）銅山（日本最大の銅山）による入手を容認

(4) 「強兵」による軍国主義の形成

・徴兵令（ちょうへいれい）（明 5）民衆反発。・陸軍省官制：軍部大臣=武官（ぶかん）（明 7）

・台湾侵略(明 7)、江華島（こうかとう）出兵（明 8）は軍部が政府を出し抜く。

・参謀（さんぼう）本部制（明 11） 天皇直属の参謀本部。政府、陸軍省もこれに従属。

・軍人勅諭（ちよくゆ）（明 15） 前文で「朕（ちん）は汝ら軍人の大元帥（だいげんすい）なるぞ」と天皇が統帥権（とうすいけん）を保持することを示し、続けて、軍人に忠節・礼儀・武勇・信義・質素の 5 つの徳目を説いた主文から成る。

3. 自由民権運動の発展と挫折

(1) 政府への不満の増大と「自由」「民権」の要求

・1871(明 4)~74 (明 7) 89 件の民衆運動。1 万人以上は 11 件。最大は 73 年、30 万人の 9 日間。米価値上がりによる苦しみから、酒屋、醬油屋、米商人、高利貸など富豪 4000 軒壊す。

・明 7、板垣退助（いたがき・たいすけ）、征韓論に破れ下野。74 年 1 月、「民選議院設立の建白」を政府に提出。

・政府に不満な者はみな「自由」「民権」を説くようになる。

・政府は 75 (明 8)、讒謗（ざんぼう）律、新聞紙条例を出して言論抑圧。

・地租改正反対一揆 愛知県：75 (明 8) ~78 (明 11)、知事の地価強要に反抗し、目的達成。鳥取県 159 か村、敗北。三重県周辺 4 県の大一揆、敗北。→政府、地租減租 2.5%へ。

(2) 自由民権の国民的闘争へ

・77 年(明 10)土佐立志社（とさ・りっししゃ）、政府弾劾（だんがい）の建白（けんぱく）書。8 か条：専制政治のもとで徴兵を行うこと、人民の税で特権政商を保護し、産業の自由な発達を妨げていること、地租が過重であること、条約改正のできないこと、など。

・78 年（明 11）11 月、愛国社（あいこくしゃ）第 1 回大会、自由民権闘争は国民的な闘争へ。

・80 年（明 13）愛国社第 4 回大会、8 万 7 千人の代表 114 名が参加。

「国会開設期成同盟」と改称。

・政府は、「集会条例」を定め、結社・言論の自由を弾圧。

(3) 国会開設の詔勅 (しょうちよく) 一政府による分裂作戦

・期成同盟第2回大会、13万余人。

・政府は、大隈 (おおくま) 派 (ブルジョワ政党の改進黨 (かいしんとう)) と自由民権派 (自由党) の共同行動を恐れ、

①大隈を政府から追放すると同時に、②国会開設 (10年後の、90年(二三年)に) の詔勅をだして、改良派と革命派の切り離しを策した。

・幹部の日和見 (ひよりみ) と戦線分裂

82 (明 15) 年 4 月、板垣、刺客に襲われる。「板垣死すとも自由は死せず」

しかし、この直後、欧州へ視察外遊に。外相井上の策謀、三井からの金で。後藤も。

改進黨は自由党を「政府に買収された」と攻撃。自由党は「改進黨首大隈は三菱と関係」と攻撃。

・87年12月、保安条例。この一撃で自由民権闘争は最後。

3. の補節 福沢諭吉 (ふくざわ・ゆきち、1万円札肖像) に見る天賦人權説の二面性 (進歩性○と保守性△)

(明治建国期—一国独立のテーマ)

・○「天は人の上に人を造らず、人の下に造らず」(天賦 (てんぷ) 人權説)、「一身独立して一国独立す」。しかし、

△同時に「身分を重んじ」「分限 (ぶんげん) を知ること肝要なり」と言う。(『学問のすすめ』、明 5)

・「維新」が成立した時に、日本では「政府」と「人民」の間に「約束」が既に成り立ち (社会契約)、「人民」に主権が移った、と福沢は理解している。しかし「社会契約」の前提である、「人民」が相互に契約を結び「政府」(天皇政府)をたてるという前提が実現されていない。

・天皇制を是認するという前提に立った、「天賦人權説」→「身分を重んじ」「分限を知る」→「官民調和論」へ

(福沢はそもそも慶応2年に、徳川将軍家による絶対王制を構想し「外国の兵を御頼 (おたのみ) 相成、防長二州を御取消し…」と進言する佐幕 (さばく) 派であった。その後、絶対主義という立場は一貫している。)

『文明論の概略』(明 8)

・西欧人が接触したアジアの国々では、まるで草も木も生えない。生産は衰えて、極端な場合には、人種そのものが滅ぼされてしまう。恐るべきは欧人である。

・○(国と国とはまったく対等である)「一国の権義においては厘毛 (りんもう) の軽重あることなし」

(欧米帝国主義列強の先兵として働きながら、日本の権益を拡大していく時期)

欧米列強が帝国主義段階に入り、アジアの植民地支配を相互に牽制しあいながら系統的に進めようとするとき、日本を利用しながらそれを進めていこうとする。それに積極的に呼応して、アジア侵略を展開する。日清、日露戦争がその頂点。

- ・△福沢の『脱亜論だつあ・ろん』(明治一八年) —王道から霸道(はどう)への転向

朝鮮や中国はこのままでは数年の間に西欧列強に分割されることは一点の疑いもない。それなら日本は、たとえ同じアジア人種であっても、彼ら悪友たちとの交わりを拒絶し、アジアを脱して西洋諸国と進退をともし、隣国にたいして西洋人がとるような仮借(かしやく)ない態度をとっても少しもさしつかえない。これは日本のやむにやまれぬ現実策だ。

「朝鮮人民のために其国(朝鮮国)の滅亡を賀す(喜ぶ)」

- ・「明治20年(1888年)以降、半世紀ほどの間に行われた50回にわたる対外戦争、対外出兵が物語っている。その間ヨーロッパと戦ったのは、わずか4回である。あとはほとんど中国と朝鮮に対してである。」(色川大吉いろかわ・だいきち『明治の精神』131頁、1970年、筑摩書房)

(欧米列強帝国主義と対抗してアジア侵略を進める時期)

第一次大戦参加(対ドイツ戦)、シベリア出兵(ロシア革命干渉戦争)、・・・、大東亜戦争、太平洋戦争 → アジアと日本に大きな犠牲を出して、敗戦。

4. 日清(にっしん)戦争、日露(にちろ)戦争への道

(1) 農民の没落と労働者の低賃金・過重労働

- ・農民の租税公課(そぜい・こうか)の負担

耕地を抵当にした負債：84年中に2億円(国家の経常歳入の2.5倍)

土地を競売処分にされた人数 1883(16年)33845人、9年間で、42万人余

- ・寄生地主制へ

小作料70%、内地租12%→55%が地主の手に。

1887(二〇年)、田の44%、畑の34%は小作地に。

農家の22%は純小作人、45%が小作地。完全自作は33%。

- ・会社資本金 84年→90年：14倍。

- ・工業：15,6時間労働、賃金、男工17~19銭、女工12銭。イギリス女工の10分の1。

紡績、4銭の少女。1日12時間2交代。

紡錘(ぼうすい)1本につき木綿量、年、日本220ポンド、イギリス35ポンド、インド134ポンド。

(2) 日清戦争

- ・94年(二七年)7月25日、清国(しんこく)艦隊を不意打ち。朝鮮の権益を確保するために。8ヶ月で勝利。李鴻章(りこうしょう)の北洋軍のみと戦う。95年4月、下関講和条約。償金3億円。

治外法権、租界など欧米諸国と同等の権利、揚子江航行権、日本資本の開市・開港権
日本を励ましたイギリスの利益。

- ・いまや英米への屈従を続け、その極東における召使いになりながら、はやくも植民地を持つ国となり、基本的に圧迫される国から圧迫する国へとかわった。
- ・三国干渉(ロシア、ドイツ、フランス) 遼東(りょうとう)半島を清国に返す。銀3千万両で。

(3) 資本主義の確立

- ・日清軍事費2億5千万円、経常歳入の2倍以上。
銀行の払込資本に対する利益率、開戦前83年：47%、94年：50%、96年：63%。
- ・3億4千万円の償金と広大な領土と市場を獲得。
- ・綿糸・綿布の輸出が輸入量を超える。清国(満州)と朝鮮で4~5割。
- ・官営八幡製鉄の創立、1897(三〇年)清国から独占的に輸入した大冶の鉄鉱。
- ・増税により、予算の40%が直接軍事費(1903)

(4) 日露開戦

- ・世界は帝国主義段階

1870~1900 先進資本主義列強、独占資本主義、金融寡頭制(きんゆう・かとうせい)、資本輸出。帝国主義

列強の極東分割競争

- ・日本の背後に英米、ロシアの背後にフランス、英仏はドイツを共通の敵とし、ドイツはロシアの西進を期待する、という複雑な状況。

戦費17億のうち8億は、英米の金融資本から募った外債でまかなう。

- ・動員兵力108万人。反戦・厭戦(えんせん)気分、与謝野晶子(よさの・あきこ)「君死にたまふことなかれ」

- ・ロシア第一革命と戦争の終結

- ・ポーツマス条約。アメリカ大統領ルーズベルト 介入。9月講和。樺太南半分。朝鮮に対する独占支配権。南満州のロシアの権益を譲渡させた。

(5) 人民の犠牲と支配階級の巨利

- ・交戦20ヶ月。10万6千人戦死、戦傷病死6万人、兵力の40%が殺された。
- ・1905年、大凶作。
- ・資本の巨利

銀行利益金 1903年(戦前)1億4200万円 → 1907年(戦後)2億2400万円

工業会社積立金 3000万円 → 6450万円

(6) 日比谷事件と大逆(たいぎやく)事件

- ・講和条約調印の1905年9月5日、「戦勝の獲物が少なすぎる」と講和反対の国民大会が日比谷公園で開かれた。数万の民衆が動員され、大会後、東京全市の警察署を打ち壊し、焼き払った。 ← 民衆に鬱積(うっせき)した不満の爆発
- ・労働争議の広がり 1905年~07年(恐慌)
- ・1910年、「大逆事件」をでっち上げ、幸徳秋水(こうとく・しゅうすい)ら24名に死刑宣告(執行12名)。
- ・「時代閉塞の現状」(1910、石川啄木)

* 中間まとめ

1. ブルジョワ革命に至らなかった明治維新。絶対主義的天皇制の成立へ。
民主主義の代用品としての「一君万民」「家族主義国家」
2. 自由民権運動に対する弾圧と民主主義の未形成。天皇を神輿(みこし)にかついだ官僚と軍部による支配。
3. 国家主導の資本主義形成(原始的蓄積)、「富国強兵」のための過酷な民衆搾取。
早期の独占資本主義の形成。労働者・農民の低所得による国内市場の狭さ。海外市場への強い要求から帝国主義的進出へ。

(以上の主な参考文献)

- 井上清・鈴木正四著『日本近代史』上下、1955年、合同出版社。
- 遠山茂樹他『近代日本思想史』第一巻、1956年、青木書店。

石川啄木(いしかわ・たくぼく)「時代閉塞(へいそく)の現状」(1910)

一魚住「自己主張の思想としての自然主義」の批判

「国家は強大でなければならぬ。我々はそれを阻害すべき何らの理由ももっていない。ただし我々だけはそれにお手伝いするのはごめんだ！」これじつに今日比較的教養あるほとんどすべての青年が国家と他人たる境遇においてもちうる愛国心の全体ではないか。そうしてこの結論は、特に実業界などに志す一部の青年の間には、さらにいっそう明晰になっている。曰く、「国家は帝国主義でもって日に増し強大になっていく。誠にけっこうなことだ。だから我々もよろしくその真似(まね)をしなければならぬ。正義だの、人道だのということにはおかまいなしに一生懸命儲けなければならぬ。国のためなんて考える暇があるものか!」

かの早くから我々の間に竄入(ざんにゅう)している哲学的虚無主義のごときも、またこの愛国心の一步だけ進歩したものであることはいままでもない。それは一見かの強権を敵

としているようであるけれども、そうではない。むしろ当然敵とすべき者に服従した結果なのである。彼らはじつにいっさいの人間の活動を白眼をもって見るごとく、強権の存在に対してもまたまったく没交渉なのである——それだけ絶望的なのである。

自然主義と称（た）えられる自己否定的の傾向は、誰も知るごとく日露戦争以後において初めて徐々に起ってきたものである

かくて今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残っているのみである。自然主義発生当時と同じく、今なお理想を失い、方向を失い、出口を失った状態において、長い間鬱積してきたその自身の力を独りで持余しているのである。…その他すべて今日の我々青年がもっている内訌的（ないこうてき）、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態をきわめて明瞭に語っている。——そうしてこれはじつに「時代閉塞」の結果なのである。

すなわち我々の理想はもはや「善」や「美」に対する空想であるわけではない。いっさいの空想を峻拒して、そこに残るただ一つの真実——「必要」！ これじつに我々が未来に向けて求むべきいっさいである。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に「今日」を研究して、そこに我々自身にとっての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。

（政治社会学的、民俗学的アプローチ）

神島二郎著『近代日本の精神構造』1961年、岩波書店、より

序説 問題の所在

人間のモーレス *mores*（生活経験の営みから形成される行動基準。習性）

これを「精神構造」と名付け、天皇制ファシズムとの関連を考察する。

第1部 天皇制ファシズムと庶民意識の問題

・天皇制の正統性的根拠は、自然村的秩序におかれ、しかも、その自然村の実体の崩壊過程が（第二のムラを生み、またそれが崩壊する過程を通して）この秩序形態に逆作用してくるところに、日本ファシズムの特質がある。

・国民意識：上からの武士的エトス（儒教）、下からの自然村的秩序感覚

学校教育における前近代的な訓練（自治）がこれらを媒介する。

（学校＝「開かれた自然村」）

・社会の階層分化、階級対立、「群化（ぐんか）」（mass化）により庶民のエネルギーは不安定化され、自然村的な「まとまりの感覚」を、既成の潜在秩序＝天皇の存在を基礎においた組織（軍部・官僚）によって吸収される。

・自然村（第1のムラ）の秩序原理

- 1 神道主義 shinto-ism、2 長老主義 gerontocracy、3 家族主義 familism、4 身分主義 feudalism 5 自給自足主義 mental autarchy（排外と排外）

・都市化によって、自然村から都市に溢れでた人々が都市に＜第二のムラ＞をつくる。

第二のムラ：実体的な生産基盤から遊離→精神主義へ→漠然たる不安
不断の社会的上昇が保障されてこそ第二のムラは安定する（立身出世）。
それゆえ、国家の絶えざる膨張発展が求められる。

・第二のムラの秩序意識 例：高等教育の場合

- 1 寮祭や対抗競技における集団的興奮を媒介とする団結心の培養（神道主義）
- 2 「先輩・後輩」「同期」の意識（長老主義）
- 3 「オヤジ・アニキ」意識（家族主義）
- 4 選抜試験を媒介とする「特権」や「序列」の意識（身分主義）
- 5 修業を契機とする「籠城（ろうじょう）」の意識（排外・排外主義）

・急速な独占資本主義化、世界恐慌の波及が、さらなる階層分化、＜群化＞（大衆化）を進め、第二のムラを解体の危機に追いやる。＜励起（れいき）＞現象が起きる（西洋近代との文化接触によって、日本の文化的要素が解体の危機に瀕することによって、かえって極端に強調されること）。

・その解決の経路は、

- 1 改造復興拡大（国家社会主義） 侵略、移民
- 2 ＜第一のムラ＞への復帰（農本主義） 農村復興、地方分権
- 3 権威の象徴への密着（天皇親政てんのう・しんせい） 祖国礼拝、天皇信仰
- 4 秩序からの疎外（隠遁（いんとん）逃避） 惰民（だみん）＝浮浪化（ふろうか）

・満州事変の前後に聞かれた農民の会話（侵略、移民、惰民＝浮浪化の兆し）

——どうせな、ついでに早く日米戦争でもおっばじまればいいのに。

——ほんとにそうだ。しかし、アメリカさんも手強いぞ。

——なに、日本の陸軍もそう簡単には負けないぞ。

——しかし、戦というものは腹がへってはかなわないぞ。

——うむ、そりゃそうだ。だが、どうせ負けたって構ったものぢやねえ、一戦のるかそるかやっつけることだ。勝てば勿論こっちのものだ、思う存分金をひったくる。負けたってアメリカならそんなひどいことをやるまい。かえってアメリカの属国になりゃ楽になるかもしれないぞ。
(橘孝三郎(たちばな・こうざぶろう)『愛国革新本義』1932)

第2部 「中間層」の形成過程

(1) 公共観念の違い—西洋と日本

・絶対君主 西欧：神に代わって絶対的に意思決定する主体。(神人隔絶の宗教が基礎)

日本：天皇は「祀(まつ)られる神」ではあるが、それ以上に皇祖である神々を

「祀(まつ)る」存在である。自ら意思決定をしない存在。(神人融合の宗教)

・西欧：+ (プラス) の私を公に媒介する。非人格的な権力、自由の論理、議会制および階級的な社会構成を生じる。

日本：— (マイナス) の私を公に媒介。パーソナルな献身の道徳、人格的な教化の体系、階級的(ヒエラルヒー的)社会構成を生じる。

滅私奉公(めっし・ほうこう)、立身出世(りっしん・しゅっせ)のモメントが発動

(2) パーソナルな献身の拡散と個人欲望の潜入

—エトスの「暗転」から欲望自然主義へ

・パーソナルな献身は、「天皇」、「公道」、「国事」、「自由」、「民権」等々に拡散する。

・献身内容についての勝手な解釈、さらに個人の欲望の潜入

・「人性本然(じんせい・ほんねん)の要求」=「本能」を満足させる「美的生活」

・「欲望自然主義」(欲望をありのまま発現させていくことの自己目的化)への暗転

・「素の根本に戻す」。「古道につもりし落葉かきわけて天照す神(あまてらすかみ)の足あとをみん」(二宮尊徳)。君主崇拝→祖先崇拝→アニミズム

*国歌「君が代」 君が代は千代に八千代にさざれ石の巖(いわお)となりて苔(こけ)のむすまで

・幕末維新の尊王論が、祖先崇拝論(儒教的)を経て神国(日本)論の復活に至る。

(3) 膨張主義=「桃太郎主義」へ

・「欲望の正直なる発露(はつろ)」を体現する桃太郎。欲望自然主義の化身(けしん)。

・犬、猿、雉(きじ)を智仁勇(ち・じん・ゆう)という武士的エトスの化身と見立て、無条件の意気投合において(契約ではない)、「若々しい元気」「がむしゃらなあばれんぼう」と「積極的+ (プラス) 主義」を推進。

・この膨張主義は、一方では幼稚主義(非政治的!)、他方では侵略主義(過政治的!)に

おちいりやすい。

- ・内憂外患一挙解決の論理によって、挙国的外征にむかってエネルギーを発散・膨張させる。

おわりに

1. 現代日本は「閉塞状況」にある

- ・日露戦争後の明治末の「閉塞状況」は、戦後では、高度経済成長後のオイルショック（1973）に相当するだろう。第1次大戦後（1914-18）の好況は、戦後のバブル経済か。
- ・そして、現在は、第1次大戦後恐慌、昭和金融恐慌（1927）、世界恐慌（1929）期の日本にあたるか。まさに危機的「閉塞状況」である。

2. 戦後日本・日本人は変わったか？

- ・表面上は、天皇制ファシズムから民主主義へ180度転換したが、日本人の「精神構造（モーレス、*Μολατηι*）」は変わっていないのではないか。
- ・天皇・「神国」の代わりにアメリカ・「民主主義」が置かれ、それが新たな「献身」の対象になっているのではないか。
- ・「欲望自然」はアメリカ的「豊かな生活」を求める強烈な欲求であり、それが「高度経済成長」の原動力となった。

「実業界では『国家は帝国主義でもって日に増し強大になっていく。誠にけっこうなことだ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの、人道だのということにはおかまいなしに一生懸命儲けなければならぬ。国のためなんて考える暇があるものか！』と」（石川啄木）

- ・「一（マクス）の私」も相変わらずで「国家」の代わりに「会社」の1モットとして働き、「会社」さらに「国」＝「日本株式会社」の膨張的發展の中に「私」の主体性実現を果たした。
- ・しかし、バブル経済崩壊以降の「失われた20年」のなかで、「国」＝「日本株式会社」はどんどん収縮（shrink）し、「一（マクス）の私」も収縮、自閉していつている。新自由主義の「自己責任」論がそれに追い打ちをかけている（たとえば「閉じこもり」人口数十万人）。
- 「すべて今日の我々青年がもっている内訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態」（石川啄木）

3. 日本・日本人はこれからどこに向かうのか？

- ・地政学的にはイギリスと似ているが、イギリスのように世界的、大局的視野を持ってない「辺境」性を持っている。
- ・また敗戦国ドイツが行ったような第2次大戦の処理を、日本はアジア諸国に対して十分には行っていない。（アメリカへの排外、アジアへの排外）
- ・奇跡の「高度経済成長」を成功体験として強く持っている現代日本人は、それを問い直

し、過剰消費の「豊かな生活」が日本人の精神構造を風化、瓦解させていることに気づかなくてはならない。

・もちろん、「神ながらの国」に戻るのではなく、日本人のメンタリティーの基軸にある「自然との共生」「他者との共生」を生かして、新しい地域循環型の経済、持続可能な社会の形成に取り組むべきである。

・今、青年たちを中心に各所で、ボランティア・市民活動が展開している。エコロジー保全、半農半X、トランジション・タウン、地域通貨・NPOバンク、災害救援、シェア（ハウス、ワーク、カー、サイクルなど）の文化などなど、新しい芽が育っている。

さいごに、イラン社会にとって近代・現代日本どのような教訓（他山の石）を提供しているのか？

・国の経済の骨格をどのように形成しているのか。そこからどのような利害が生み出され、政治の世界を動かしているのか。

・宗教的権威が政治を動かす時、どういう問題が出てくるのか。宗教の性格のみならず、それを支えている民衆の意識の根底にある精神構造（モリス）の重層性に目を向けて深い考察、自省をしなければならない。

・それを踏まえ、真にナショナルと言えるもの、その国の民衆の人間性、その国の持続可能な生態系を保全、発展させることができる方向に社会を変革していきたいものである。